（第３種郵便物認可）　総合

日刊建設工業新聞社
THE DAILY ENGINEERING & CONSTRUCTION NEWS

2018年（平成30年）5月8日 火曜日
第19420号

発行所 日刊建設工業新聞社
〒105－0021 東京都港区東新橋２－２－10
電話03（3433）7161 http://www.decn.co.jp/
©日刊建設工業新聞社 2018
記事 電話03－3433－7161 mail-ed@decn.co.jp
編集 電話03－3433－7152 mail-sa@decn.co.jp
広告 電話03－3433－7154 eigyo@decn.co.jp

明治維新150年と治水の歴史

竹林征三

〈10〉青山士の碑文の謎

日本には夥（おびただ）しい治水の碑がある。そのうち、最も有名な碑文は、大河津分水堰修復工事竣工碑に刻された青山士氏の『萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ　人類ノ為メ國ノ為メ』ではなかろうか。この石碑は下段にエスペラント語による文章が記されていることでも有名である。また萬象とか天意とか、人類のためとか国のためとか文言のスケール感があり、一度口ずさめば忘れられないフレーズである。この文言の意味することを、筆者の青山士氏に問えば、各自で自由に解釈してもらってよいと、語ってくれなかったいう。この銅板に刻された碑文の真意を考えてみたい。

この碑文のバックに文様がデザインされている。表面は峨々（がが）たる山並みのよう。裏面は洪水時の激浪・三角波のようである。三角波の左端の折線は稲妻のようである。さらによく見れば、表面の真ん中に円があり、その中に三本足のカラスが描かれている。裏面の真ん中にやはり円があり、その中にきねで臼をたいている動物が描かれている。ウサギの餅つきのようにも見えるが、牛のような大きな動物である。この碑文の台座は事故を起こしたベアトラップ堰の堰柱という。これは何を意味しているのだろうか。

三本足のカラス「三足烏」とは日本神話に登場する神武天皇東征先導役の八咫烏（やたがらす）のようでもある。実は、日本の八咫烏も中国の神話から各地に広がった想像上の鳥である。もうひとつの動物は中国の神話に出てくる「夔（き）」という動物であることに気が付いた。中国神話で「三足烏」は太陽を象徴する火鳥。崑崙山（こんろんさん）に西王母という神が住み、不老不死の薬を持っている。崑崙山の石室にあり、立派なヒョウタンに入っている。「三足烏」は宝物・不死の薬の番をしている鳥だったという。洪水神話の場合、宝物はどこまでも増え続ける土「息壤」（そくじょう）に当たり、鯀（こん）が手に入れようとしたものである。一方で夔は一本足の怪神で、恐れ慎むとの意味がある。夔の文字は「北」「頁」「止」「巳」「夊」の合字。「北」は角、「頁」は人面、「止」と「巳」は左右の手、「夊」は足を意味する。月を象徴する怪神の声は雷の如く五百里先まで届く。黄帝がその皮で鼓を作りたたけば、その音は五百里まで聞こえる。夔は楽祖でもある。

『書、舜典』に、「帝曰く、夔よ汝に命じて楽を典（つかさど）らしむ」「夔曰く、ああ我、石を撃ち、石を打てば百獣率いて舞う」とある。夔が怒れば雷鳴とどろき大豪雨となり、洪水を引き起こす。また一方、助けを求めれば百獣を率いて大きな力を発揮する。複雑な両面を持つ神獣である。

中国では、中華の地と四周の国家ごとに神話がある。創世神話の最初が洪水神話である。国家は定住し、富を蓄えなくては存在しない。そのためには水稲耕作が有効である。水稲のためには水が必要。水は暴れる洪水でもある。この洪水を起こす神を慰撫（いぶ）する治水の神の誕生である。最も古くて有名な治水神話が鯀の治水の失敗と禹の治水の成功の伝説である。青山士が竣工碑の銅板背景にデザインしたのは萬象ではないだろうか。青山士の萬象とは▽峨々たる山並みは地圏▽洪水の三角波は水圏▽雷光は気圏▽鳥獣は生物圏▽三本足のカラスと夔は神話・歴史文化圏▽石碑の台座にした自在堰の堰柱は社会基盤・生活活力圏―を意味する。風土工学のいう六大風土とまったく同じことをいっている。

〈参考文献・『物語日本の治水史』鹿島出版会〉

（富士常葉大学名誉教授、風土工学デザイン研究所理事長）

―週１回掲載